

資 料

## 認知症の理解推進プログラムに参加した 地域住民の認知症および相互意識への関心の変化

丸 尾 智 実\*<sup>1</sup>・河 野 あゆみ\*<sup>2</sup>

Community-dwelling People Successfully Participate in a Program to Promote  
Mutual Recognition and Change Participants' Understanding of Dementia

MARUO Satomi and KONO Ayumi

**要旨**：本研究は、自治区ごとの地域住民に実施した「認知症の理解促進プログラム」の第1回と第3回に行った「認知症のイメージの共有」での対象者の発言を比較して、対象者の認知症の関心がどのように変化したかを明らかにすること、また、地域住民同士の相互意識を高めることができたかについて検討することとした。研究対象は、2009年6月～10月にA県下2市6自治区の地区公民館で実施したプログラム内の「認知症のイメージの共有」での参加者の発言内容とした。分析は、Krippendorffの内容分析に基づいて行い、認知症に関する単語前後の文意を検討して文脈単位で抽出し、その内容の共通性に従ってサブカテゴリ化、さらに考えられるシンボリックな意味をカテゴリとして命名した。分析の結果、抽出されたカテゴリである積極的内容の相対頻度は第1回では32.1%であったが、第3回では64.1%に増加した。また、積極的内容は【認知症にならないように努力したい】【認知症の適切な知識を得たい】【認知症の人を地域で支えたい】の3つのサブカテゴリで形成され、全体として第1回に比べて第3回の積極的内容で文脈の種類が増加していた。以上より、プログラムを通じて、参加者は認知症への関心を消極的内容から積極的内容へと変化させ、認知症の人を地域で支えたいという地域住民の相互意識を高めていたと考えられた。

**キーワード**：地域住民，認知症，相互意識，関心，変化

**Abstract** : This study examined a three-part program to determine whether it improved understanding of dementia in community-dwelling people. Data were the speech content of participants in the “sharing of dementia image” program that was carried out at six different areas in two different cities from June to October 2009. Content analysis was performed following Krippendorff. We extracted content by considering the meaning of a sentence before and after words related to dementia, and named sub-categories in accordance with commonality of the content, in order to create a category with symbolic meaning. Results showed that the relative frequency of positive contents from the extracted category increased from 32.1% part one to times 64.1% in part three. In addition, the positive contents formed three subcategories : ‘how much I want to avoid getting dementia’, ‘how much I want to acquire appropriate knowledge about dementia’ and ‘how much I want to support people with dementia in our community’. As a whole, the three types of positive content increased in frequency when comparing the first time to the third time. Consequently, through the program, the participants’ contents changed from negative to positive, and they have enhanced their mutual recognition of community-dwelling people who want support to people with dementia.

**Key Words** : community-dwelling people, dementia, mutual recognition, understanding, change

\*<sup>1</sup> 甲南女子大学看護リハビリテーション学部看護学科

\*<sup>2</sup> 大阪市立大学大学院看護学研究科

## I. はじめに

平成27年1月に発表された認知症施策推進総合戦略(新オレンジプラン)では、認知症の人等にやさしい地域づくりの実現を掲げ、認知症の人が主体的に認知症とよりよく生きていくことができるような環境整備が必要であることを指摘している<sup>1)</sup>。また、新オレンジプランの基本的政策の柱として、地域住民への認知症への理解を深めるための普及・啓発の推進や認知症高齢者の地域での見守り体制の整備等をあげている<sup>1)</sup>ことから、認知症の人が住み慣れた地域でより長く生活を継続するためには、地域住民が認知症に対して適切な理解することに加え地域住民同士の繋がりを強化する働きかけが重要となると考える。

地域住民同士の繋がりを強化するためには、地域住民同士が日頃から関係性を保つこと<sup>2)</sup>、現存するコミュニティを有効活用するための支援が必要であること<sup>3)</sup>が指摘されている。また、地域住民が自分の地域で暮らし続けることを選択可能にするための必要な要件として「高齢者が暮らしやすい地域にするために自分の力が役立つ」といった地域の高齢者福祉に対する影響力意識が高いことが重要であり、これらの地域住民の潜在化されたパワーを高めることが必要であるとの指摘がある<sup>2)</sup>。すなわち、認知症の人が住み慣れた地域で暮らし続けるためには、地域住民の認知症への関心を高めるとともに地域住民同士の相互意識を高めるような働きかけが重要であると考えられる。

このような地域住民の認知症への関心と地域住民同士の相互意識を高めるために、筆者は、地域住民を対象に認知症の理解を推進するためのプログラムを自治区ごとに実施してきた。このプログラムは全3回で構成され、第1回と第3回には「認知症のイメージの共有」という場を設定して、地域住民同士が認知症に対してどのような関心を持っているのかを話し合う機会を設けた。そして、地域住民同士が互いに持っている認知症に対する考え方を共有することで地域住民同士の交流を図るとともに地域での課題意識を高めることを期待した。

本研究では、この第1回と第3回の「認知症

のイメージの共有」における参加者の発言から、本プログラムの参加者の認知症の関心がどのように変化したか、また地域住民同士の相互意識を高めることができたかについて検証し、今後の地域住民への認知症の理解の普及や啓発を推進する方略について示唆を得ることとした。

## II. 研究目的

本研究では、自治区ごとの地域住民に実施した「認知症の理解促進プログラム」の第1回と第3回に行った「認知症のイメージの共有」での参加者の発言を比較して、参加者の認知症の関心がどのように変化したかを明らかにすること、また、地域住民同士の相互意識を高めることができたかについて検討することとした。

## III. 「認知症の理解促進プログラム」の概要

「認知症の理解促進プログラム(以下、プログラム)」は、Penderのヘルスプロモーションモデルを理論的背景として作成した。このモデルでは、行動変容には、行動にかかわる感情や自己効力感、行動の利益や障壁の認識、人間関係や状況的影響が関与すると説明されている<sup>4)</sup>。したがって、地域住民が自身の認知症に対する感情や認知症への自己効力感を認識するとともに、地域住民との交流で楽しさや安心感などの状況的影響の効果によって地域住民同士の人間関係を構築する過程を通して、地域住民の認知症に対する意識や行動が変容することができると考えた。また、地域住民が問題意識を共有するためには地域と自身の問題が重なることが重要であることが指摘されていることから<sup>5)</sup>、認知症という共通の課題を通して地域住民が自身の課題から地域の課題へと視点が広がるようにプログラムを構成した。プログラムの内容を表1に示す。なお、プログラムの目標とねらいおよび質問紙調査による評価結果は別論文に掲載済みである<sup>6)</sup>。

表1 認知症の理解推進プログラムの内容

| 第1回 | 『自分の脳と認知症を理解しよう!』   |
|-----|---|
| 内容  | 1. 認知症のイメージの共有 (15分)：全員で認知症のイメージを共有しよう<br>2. 自分の脳チェック (50分)：ファイブ・コグ<br>3. ミニ講義 (20分)：認知症と脳の関係について   |
| 第2回 | 『脳をイキイキさせるのはあなた次第?!』  |
| 内容  | 1. 脳チェックのフィードバック (20分)<br>2. 講義・アクティビティ (50分)：生活での認知症予防のコツと体験<br>3. 講義・グループワーク (50分)：お付き合いと認知症予防の関係とワーク   |
| 第3回 | 『認知症は身近な病気!～認知症になってもこの町に住もう!～』  |
| 内容  | 1. グループワークと発表 (30分)：地域に住む夫婦 (妻が認知症) の事例から、認知症高齢者・家族の気持ちを考える。<br>2. ミニ講義：認知症高齢者・家族の支援について (15分)<br>3. グループワークと発表 (30分)：地域に住む夫婦 (妻が認知症) の事例から、認知症高齢者・家族の支援を考える。<br>4. 認知症のイメージの共有 (15分)：全員で認知症のイメージを共有しよう |

## IV. 方 法

### 1. 研究対象および方法

研究対象は、2009年6月～10月にA県下2市6自治区の地区公民館で実施した「みんなで知ろう!脳と認知症と地域で支える大切さ」という全3回のプログラム(1回約2時間、2～3か月間で3回実施)内の「認知症のイメージの共有」での参加者の発言内容とした。

このプログラムには、1つの自治区で10～40人が参加した。すべての自治区での参加者を合わせると、参加人数は第1回が149人(平均年齢70.6±7.3歳、女性81.1%、平均教育年数12.0±2.1年)、第3回が106人(平均年齢69.9±6.9歳、女性78.3%、平均教育年数12.3±2.0年)であった。なお、第1回と第3回では参加人数が異なるが、基本的に第1回の参加した者が第3回も継続して参加している。

「認知症のイメージの共有」はプログラムの第1回のプログラム開始直後と第3回のプログラム終了前に約15分設定した。参加者には「『認知症』という言葉聞いて思い浮かぶ言葉や思いを一言話して下さい」と問い発言を求めた。また、時間の関係上、20人以上が参加した自治区では、複数のグループに分かれてグループ内で発言をしてもらうようにした。なお、この「認知症のイメージの共有」の進行は、自治区ごとに行った場合は研究者が、複数のグループに分かれて行った場合は、地域にある介護

保険施設の職員で普段から研究協力地区の活動に参画している看護師、介護福祉士、社会福祉士、地区役員などが行った。

### 2. 分析方法

分析は、Krippendorffの内容分析に基づいて行うこととした。Krippendorffは内容分析の要件の1つにメッセージのシンボリックな意味付けを掲げ、それらの分布上の特徴を見出して、得られた知見や課題を検討することの重要性を述べている<sup>7,8)</sup>。したがって、本研究では、「認知症のイメージの共有」で語られた内容がどのようなシンボリックな意味を持つかを検討し、それらの特徴から、本研究の目的である参加者の認知症および地域住民同士の相互意識がどのように変化したかを検討することとした。

具体的には、まず、「認知症のイメージの共有」での参加者の発言内容をICレコーダーに録音し、逐語化してデータとした。そして、これらのデータを認知症に関する単語前後の文意を検討して文脈単位で抽出し、その内容の共通性に従ってサブカテゴリ化した。さらに、サブカテゴリから考えられるシンボリックな意味をカテゴリとして命名した。カテゴリの内容および文脈単位は絶対頻度(n)と相対頻度(%)で評価し、第1回と第3回のプログラムでの変化を検討した。なお、分析内容は複数人からアドバイスを受けながら繰り返し見直し、抽出した内容に対して統一した見解が得られるまで協議した。

## V. 倫理的配慮

参加者には、本研究の目的を十分に説明し、本研究への参加は自由であり研究への参加を同意した後でもいつでも辞退できること、それにより参加者が不利益を被ることが一切ないことについて、文書を用いて口頭にて説明した。また、このプログラムの開催で知り得た参加者の情報は研究以外の目的で使用しないこと、その際には匿名性を確保することについても同様に説明し、これらについて文書にて同意を得た。なお、本研究は、大阪市立大学大学院看護学研究科倫理委員会の承認を得て行った（承認番号12-2-2）。

## VI. 結果

「認知症のイメージの共有」で抽出された認知症に関する文脈の絶対頻度は、第1回が168単位、第3回が131単位であった。また、抽出された文脈およびサブカテゴリから、語られたシンボリックな内容は、認知症に対して積極的と考えられる内容（以下、積極的内容）と消極的と考えられる内容（以下、消極的内容）の2つと考えカテゴリに命名した。なお、本文では、サブカテゴリを【 】, 文脈を[ ]として、以下に結果を記述する。

### 1. カテゴリからみた頻度の変化

第1回と第3回の「認知症のイメージの共

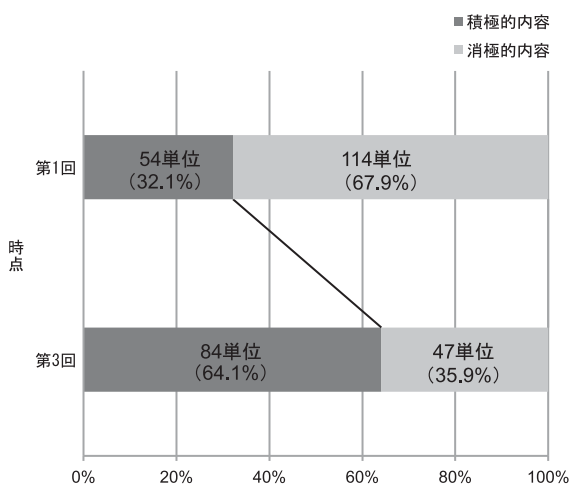


図1 「認知症のイメージの共有」で抽出された積極的内容と消極的内容の頻度の変化

有」で語られたシンボリックな内容であるカテゴリ、すなわち、抽出された積極的内容と消極的内容の頻度の変化を図1に示す。

積極的内容の相対頻度は第1回では32.1%であったが、第3回では64.1%に増加した。積極的内容の頻度の変化に伴い、消極的内容の相対頻度は第1回では67.9%であったが、第3回では35.9%に減少した。

### 2. サブカテゴリおよび文脈内容からみた頻度の変化

第1回と第3回の「認知症のイメージの共有」で語られたカテゴリを形成するサブカテゴリとその文脈内容および全文脈に占める頻度の比較を表2に示す。

#### 1) 積極的内容の比較

積極的内容は【認知症にならないように努力したい】【認知症の適切な知識を得たい】【認知症の人を地域で支えたい】の3つのサブカテゴリで形成された。

【認知症にならないように努力したい】では、[認知症にならないように努力したい]という文脈が抽出されたが、これは第1回と第3回とも文脈の30%前後を占めており、特に大きな変化はみられなかった。しかし、第3回では現在参加者自身が行っていると考えられる[認知症の予防を続けたい]という文脈が新たに2.3%抽出された。

【認知症の適切な知識を得たい】では、第1回は[認知症の対応を知りたい]という文脈のみ(0.6%)であったが、第3回では[認知症は誰でもなる可能性がある][認知症の怖さがましになった][認知症が病気だとわかった]など12.2%に増加していた。

同様に【認知症の人を地域で支えたい】では、第1回は[地域の交流や地域で支えることが大切である]という文脈が1.2%であったが、第3回では17.6%に増加していた。

#### 2) 消極的内容の比較

消極的内容は【認知症にはなりたくない】【認知症への不安がある】【認知症への理解が不十分である】の3つのサブカテゴリで形成された。

【認知症にはなりたくない】では、第1回は[認知症にはなりたくない]という文脈が42.9

表2 「認知症のイメージの共有」で抽出された文脈内容の頻度の比較

|                         | 第1回<br>n=168<br>単位数 (%) | 第3回<br>n=131<br>単位数 (%) |
|-------------------------|-------------------------|-------------------------|
| 積極的内容                   |                         |                         |
| 認知症にならないように努力したい        |                         |                         |
| 認知症にならないように努力したい        | 51(30.4)                | 41(31.3)                |
| 認知症の予防を続けたい             | 0                       | 3( 2.3)                 |
| 認知症の適切な知識を得たい           |                         |                         |
| 認知症の怖さがましになった           | 0                       | 3( 2.3)                 |
| 認知症が病気だとわかった            | 0                       | 2( 1.5)                 |
| 認知症は誰でもなる可能性がある         | 0                       | 5( 3.8)                 |
| 認知症は本人がわからないわけではない      | 0                       | 1( 0.8)                 |
| 認知症と折り合いをつけることが大切だ      | 0                       | 1( 0.8)                 |
| 認知症の対応を知りたい             | 1( 0.6)                 | 0                       |
| 認知症の対応がわかった             | 0                       | 2( 1.5)                 |
| 次は楽に介護できると思う            | 0                       | 2( 1.5)                 |
| 認知症の人を地域で支えたい           |                         |                         |
| 地域の交流や地域で支えることが大切である    | 2( 1.2)                 | 23(17.6)                |
| 介護方法を次の世代に伝えていくことが大切である | 0                       | 1( 0.8)                 |
| 消極的内容                   |                         |                         |
| 認知症にはなりたくない             |                         |                         |
| 認知症にはなりたくない             | 72(42.9)                | 24(18.3)                |
| 認知症は怖い                  | 9( 5.4)                 | 6( 4.6)                 |
| 認知症は残酷である               | 1( 0.6)                 | 0                       |
| 認知症は寂しい                 | 1( 0.6)                 | 0                       |
| 認知症への不安がある              |                         |                         |
| 認知症になるのではという不安がある       | 6( 3.6)                 | 6( 4.6)                 |
| 現在物忘れがひどいので認知症かもしれない    | 5( 3.0)                 | 2( 1.5)                 |
| 認知症になると家族や周りに迷惑をかけると思う  | 9( 5.4)                 | 2( 1.6)                 |
| 認知症を考えたくない              | 1( 0.6)                 | 0                       |
| 認知症への理解が不十分である          |                         |                         |
| 認知症がわからない               | 7( 4.2)                 | 1( 0.8)                 |
| 認知症は本人はわからない            | 3( 1.8)                 | 6( 4.6)                 |

%を占めていたが、第3回では18.3%に減少していた。

【認知症への不安がある】では、第1回は「認知症になるのではという不安がある」「現在物忘れがひどいので認知症かもしれない」「認知症になると家族や周りに迷惑をかけると思う」などの文脈が12.6%を占めていたが、第3回では7.7%に減少した。しかし「認知症になるのではという不安がある」の文脈では、第1回と第3回で絶対頻度は変わらなかったが、相対頻度では増加していた。

【認知症の理解が不十分である】では、「認知症がわからない」という文脈が第1回の4.2%に比べて第3回で0.8%に減少したが、「認知症は本人はわからない」という文脈が第1回の1.8%に比べて第3回で4.6%に増加していた。

### 3) 文脈内容の種類比較

全体として、第1回に比べて第3回の文脈の

種類が増加しており、特に積極的内容で種類が増加していた。

## Ⅶ. 考 察

### 1. 地域住民の認知症への関心の変化

「認知症のイメージの共有」で参加者が語ったシンボリックな内容は、認知症に対する積極的発言と消極的発言の2つに大別されていたことが明らかとなった。特に、第1回に比べて第3回では認知症への積極的内容の文脈が増加し、反対に消極的内容の文脈が減少していたことから、参加者がプログラムへの参加を通じて、認知症に対しての関心が消極的内容から積極的内容へと変化したと考えられた。

サブカテゴリおよび文脈内容をみると、第1回では、全文脈において、積極的内容の「認知症にならないように努力したい」が全文脈の3

割、積極的内容の文脈だけで見ると9割以上を占めていた。これには、自分自身が認知症にならないためにはどうしたらよいかという参加者のプログラムへの参加の意向が強く表出された結果と考えられる。また、なぜ認知症にならないように努力したいと考えたのかという点を考えると、その背景には認知症への消極的内容が含まれる可能性も考えられた。先行研究では、自分が認知症になることへの不安が強い人は不安がない人に比べて、認知症に対して悲しさや怖さ、大切にされないといったイメージを持っていることが指摘されている<sup>9)</sup>。したがって、本研究では「認知症にならないように努力したい」という文脈を「認知症への自身での前向きな取り組み」と捉え積極的内容としたが、その背景には「認知症にはなりたくない」「認知症への不安がある」といった参加者の認知症への消極的な関心が潜在している可能性が考えられた。すなわち、消極的内容の「認知症にはなりたくない」という文脈が4割を占めていたことを考えると、認知症になりたくないという関心を持ってプログラムに参加した地域住民が約7割を占めていたと推測された。

しかし、第3回では、「認知症にはならないように努力したい」という文脈は第1回と比べて変わらなかったものの、「認知症になりたくない」という文脈が減少しており、加えて積極的内容の文脈の種類が増加していた。したがって、プログラムに参加して認知症の適切な知識を得たことによって、参加者の多くを占めていた認知症への消極的な関心が積極的な関心に変化したと考えられた。

## 2. 地域住民同士の相互意識の変化

「認知症のイメージの共有」で語られた内容から抽出されたサブカテゴリおよび文脈において、第1回に比べて第3回で増加した積極的内容は【認知症の人を地域で支えたい】というサブカテゴリであった。これは、第1回ではほとんどみられなかった文脈であったが、第3回では約2割に増加していたことから、認知症という共通の課題を通して地域住民が自身の課題から地域の課題へと視点が広がるように構成したプログラムの意図を反映した結果であると考えられた。また、消極的内容では「認知症になる

と家族や周りに迷惑をかけると思う」という文脈が抽出されたが、ある参加者からは「私が認知症になったら迷惑をかけると思いますので、地域の皆さん、私を助けてください」という発言がみられた。さらに、質問紙調査の結果においても「認知症高齢者とその家族を自分の地域で支えることができる」という項目でプログラム実施後に得点が有意に上昇していた<sup>6)</sup>。したがって、参加者は、認知症という自分自身の「個」の関心から地域に関わる課題として認識し、地域住民で助け合うという関心に変化したと考えられ、プログラムへの参加を通じて地域住民の相互意識を高めていたことが示唆された。

## 3. 本研究の限界と今後への示唆

本研究の限界として、参加者が比較的活発な地域に住み、研究に協力的な集団であったこと、参加者の約8割が女性であったこと、第1回と第3回での対象者の人数が異なることから、抽出された文脈には偏りがある可能性が考えられることが挙げられる。また、今回は「認知症のイメージの共有」という場での参加者の発言内容を分析しており、インタビューという相互作用の中から対象者の発言を引き出した訳ではなく、対象者が認知症という言葉から思い浮かぶ言葉や思いを自由に話した内容から文脈を抽出したため、その背景にある対象者の複雑な感情や考えを十分に反映できていない可能性がある。さらに、抽出された文脈には、認知症の知識として誤った解釈ととれる内容が含まれており、その内容は少ないものの第1回に比べて第3回で頻度の増加が認められた。新オレンジプランでは、認知症の人の視点に立って認知症への社会の理解を深めるキャンペーンを実施していくことが新たな戦略として掲げられていることから<sup>1)</sup>、地域住民への認知症の適切な理解をどのようにして普及していくかを検討することが必要と考えられた。

本研究では、プログラムの「認知症のイメージの共有」で語られた内容を分析した結果、認知症の理解推進プログラムに参加した地域住民の認知症への積極的な関心と地域住民の相互意識を高めることにつながることを示唆された。認知症高齢者とその家族への地域での支援は今

後益々重要となる。新オレンジプランという国家戦略を基盤に、認知症という課題を通して、地域住民同士の繋がりを強化する働きかけが重要であると考ええる。

#### 謝辞

本研究にご参加にご承諾いただいた地区長、地区役員、地域住民の皆様にご心より御礼申し上げます。また、本プログラムを実施するにあたり、多大なご協力をいただきました社会福祉法人みささぎ会理事長奥田益弘様、認知症予防自立支援プロジェクト推進室、社会福祉法人そうび会つるぎ荘在宅介護支援センターのスタッフの皆様にご感謝申し上げます。さらに、本研究にアドバイスをいただきました大阪市立大学大学院のゼミの皆様にご感謝申し上げます。

なお、本研究は、平成21年度厚生労働省科学研究費補助金認知症対策総合研究事業（イ）認知症のケア手法の開発に関する研究1）BPSDの対応における医療とケアの役割分担・連携に関する研究（21230201）「認知症のBPSDに対する原因疾患別治療マニュアルと連携クリニカルパス作成に関する研究」（研究代表者：数井裕光）の研究の一部として実施した研究の成果である。

#### 引用文献

- 1) 厚生労働省：認知症施策推進総合戦略（新オレンジプラン）～認知症高齢者等にやさしい地域づくりに向けて～。 [http://www.mhlw.go.jp/file/04-Houdouhappyou-12304500-Roukenkyoku-Ninchishougyakutaiboushitaisaku-suishinshitsu/02\\_1.pdf](http://www.mhlw.go.jp/file/04-Houdouhappyou-12304500-Roukenkyoku-Ninchishougyakutaiboushitaisaku-suishinshitsu/02_1.pdf) (2015年8月24日アクセス可能)
- 2) 渡辺裕一：限界集落における高齢期ひとり暮らし時永住希望とコミュニティ・エンパワメントの関連－高齢者の生活を支援する地域住民パワーとの関連を中心に－。日本保健福祉学会誌 2012；18(2)：11-20.
- 3) 西野達也，桑木真嗣：高齢者通所施設利用者の生活からみたある地縁型地域における地域住民らによる共助のみられる共存の場に関する事例考察。日本建築学会計画系論文集 2009；74(642)：1707-1715.
- 4) Pender NJ, Mudrdaugh CL, Paesons MA：Health promotion in nursing practice (4<sup>th</sup> ed), Prentice Hall NJ 2002；61.
- 5) 渡辺裕一：高齢者福祉活動の必要性に関する地域住民の意識。厚生指標 2007；54(1)：1-8.
- 6) 丸尾智実，河野あゆみ：地域住民を対象とした認知症の理解推進プログラムの試み－プログラム実施前後の質問紙調査による評価－。日本地域看護学会誌 2012；15(1)：52-60.
- 7) K. Krippendorff. 三上俊治ら訳。メッセージ分析の技法「内容分析」への招待。勁草書房，東京，2009.
- 8) 上野栄一：内容分析とはなにか－内容分析の歴史と方法について－。福井大学医学部研究雑誌 2008；9(1,2)：1-18.
- 9) 久木原博子，内山久美，阪本恵子，他：高齢者における「認知症」に関するイメージと知識。看護学統合研究 2011；13(1)：16-21.